

国立国語研究所学術情報リポジトリ
日米対照：女性の座談：発話文の数量的分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): contrastive study, American and Japanese female conversation, utterances, silence, ideational factor 作成者: 佐々木, 優子, SASAKI, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001367

日米対照：女性の座談

—発話文の数量的分析を中心に—

佐々木 優子

SASAKI Michiko: A Contrastive Study of American and Japanese Female Conversation: a Quantitative Analysis of Utterances

要旨：本研究は、かなり統一された条件のもとに行われた4種の女性同士の座談から、日米の女性の会話スタイルの差異を、実証的に明らかにすることを目指すものである。本論では、主として収集データの質の検討と、発話文の数量的分析を行った。数量的分析からは、データの範囲内で以下の傾向が見られた。

- (1) 沈黙の回数では日米で差は見られないが、データ中の米国人、日系米人、日本人の順で、座談の途中に長い沈黙が入るのを回避しがちだった。
- (2) 発話文数を見ると、日本語座談は米語座談より数が多く、重複文も多い。
- (3) 実質量小の発話文の発生率と、重複文の発生率はほぼ呼応する。
- (4) データ中の日本語座談では実質量大の発話文が2文に1文程度の割で発された。これに対し、日系米人座談では60%台、米国人座談では70%台を占めた。

キーワード：対照研究、日米女性座談、発話文、沈黙量、実質量

Abstract : This analysis attempts to show the differences in conversational style between American and Japanese female conversation, based on data from four relaxed discussions participated in by three female native speakers. The paper examines the quality of the data and presents a quantitative analysis of data. The analysis of utterances with little propositional function shows a clear cultural tendency, with such utterances appearing the most frequently among Japanese, less among Japanese-Americans, and the least among Americans.

Key words : contrastive study, American and Japanese female conversation, utterances, silence, ideational factor

はじめに——日本人の寡黙さへの言及

以下は、1970年代にかなり広く読まれたと思われる書物の中の、日本人のコミュニケーションに関して言及している部分のごく一部である。

——日本人にとっての言葉は、いわばキーワードのようなもので、エッセンスとなることを少しうるだけ相手にほぼ通ずる。したがって、ちょっと喋ればよく、あとはニューアンスばかりに苦心して、敬語や婉曲な表現などの修飾的なものに重点がある。(中略)ところが、他の国では非常に違う。言葉は意志や感じ方を正確に伝えるための手段であり、誤解や行き違いの生ずる余地を全くなくす表現に重点がある。——

稻村 博『日本人の海外不適応』

——島国言語の(中略)特質は、話の通じがたいへんよいということである。ツーといえばカーとくる。(中略)その典型は家族間の会話である。省略の多い、要点のみをおさえた言葉のやりとりをしていて、お互いに理解し合っている。(中略)家族の会話というのは、どんな大陸言語の性格のつよい社会でも通人的、したがって島国言語的なものである。ただ、日本語は、普通は家族の間で行なわれるような言語活動の様式が親密な集団の範囲をこえて広く認められるのである。——

外山 滋比古『日本語の論理』

——総合的にいって日本人は、より形式的でより規制された対人接触を好み、自己を表明する場合に、控え目で警戒的になりがちであり、開放的で率直であるよりは、回避的で沈黙しているほうを好む。(中略)一般的にいってアメリカ人は、より自己主張し、自己表現をするように見えるし、他人ともっと形式ぶらない対面を求め、もっとくだけて、おしゃべりであり、そして自分を表現するのに、もっと隠しだてせず率直であるようである。もし日本人が「内包的」と性格づけられるとしたら、アメリカ人は「表現的」といっていいだろう。——

バーンランド ディーン『日本人の表現構造』

——日本人の言語生活の特色として、第一に話さないことをよしとする精神がある。また、断定的な物言いを避けようとし、間接的な表現を好む。——

金田一 春彦『日本人の言語表現』

上記で共通して指摘されているのは、日本人の「寡黙さ」とでもくくれる特質であろう。類似した言及は現在もしばしば見かける。しかし、言及の中には個人的な経験からきた印象論の域を出ないものや、従来の文化論の繰り

返しもないわけではない。言語学的研究の立場に立つものでも、日本語あるいは英語の分析を行い、もう一方の言語については、他の研究者による資料と分析の結果を借用する形が採られることもある。日米対照研究がなされている場合にも、条件の異なる談話の対照研究によって結論を引き出している場合も見られる。厳密な対照研究に基づく報告では、セールス・トーク、ビジネス・トークといったジャンルを限ったもの(Tsuda(1984), Yamada(1992)など)、大学生を対象としたもの(Maynard(1989)、井出ほか(1986)など)が目付く。

本研究では、かなり統一された条件のもとに行われた、日本語ないし米語による成人女性の座談から、女性同士の自然会話に現れたスタイルの差異を実証的に明らかにすることを目指している。その中で、本稿は会話の質的分析に入る前段階として、データの質を検討し、次にその数量的分析を報告するものである。

1. データ

1.1. データとしての座談資料

はじめに、なぜ座談を探り上げるのかを考えたい。自然言語の分析を行う時にもっとも頭を悩ませるのは、手に入れたデータが自然さを保ったものであるかという点である。それを考える時、データ収集の際の技術的な面からの制約は軽視できない。自然さが保ちやすいという点では、買物場面や食事場面は座談場面よりも優れているかもしれない。参加者や話題の均質性を、収集する側で、ある程度コントロールできるメリットは共通している。しかし、後者は録画・録音で上質のものが得やすい。そして、このほかにも座談にはいくつかの利点がある。

Hymes (1972) は発話事象を構成する要素として、SPEAKING という頭文字から始まる 8 つの要素をまとめている。(S)Setting : 設定・環境, (P) Participant : 参加者, (E) Ends : 目標, (A) Act Sequence : 発話の形式と内容の流れ, (K) Key : 基調, (I) Instrumentalities : 手段, (N) Norms : 規範, (G) Genre : ジャンル, である。日米の話し方の対照研究のために、日本語と

アメリカ英語（以下、米語）のデータを収集するにあたっては、上記の要素を出来得る限り同一条件下におくこと、そして、日米どちらのスピーチ・コミュニティにおいても、データとなる座談が、特殊な限られた場面にのみ現れるものではないことを心がけた。書きことばも含めて、ひとつのスピーチ・コミュニティのコミュニケーション活動全体を見回した時、採り上げる言語場面が日常一般的に見られるものであり、また、運用される言語の形態も特殊な形にならないものであることを願ったと言える。各1時間程度の座談であるが、日本人東京座談（以下、「東京・日」）、日本人ニューヨーク座談（「NY・日」）、日系アメリカ人ホノルル座談（「HL・米」）、アメリカ人ニューヨーク座談（「NY・米」）について、コミュニケーションの要素別にデータの質を考えてみたい。

1.2. データの中核性

(1) Setting 設定・環境

座談を行った場所は、4座談とも参加者の生活空間ではなかったが、かけ離れている場所でもなかったと言える。つまり、自宅の居間や職場の休憩室で雑談をするといった気楽な設定ではなかったが、同時に実験室やテレビスタジオなどでインタビューに答えるといった緊張感を生む場所でもなかった。「HL・米」座談が、大学の応接室というやや公的な場所で行われた以外は、座談収録者の自宅で行った。参加者の環境に対する緊張度から言えば、特に気楽でもないし、といって特に緊張することもない場所と言えよう。

また、VTRカメラによる録画とカセットテープレコーダーによる録音を行ったが、カメラ一台を部屋のすみに、小さなカセットテープレコーダーをテーブルの真ん中に、それぞれ置く形をとった。参加者だけの座談に入ってからは、収録者は姿を消す形をとって、録音・録画機械を回し放しにした。このことで、収録の質は落ちても、収録が会話スタイルに与える影響はかなり小さく押さえられたのではないかと考えている。

(2) Participant 参加者

参加者の属性は以下の通りである。

①東京・日 1994.6 収録

- A 60代 外資系企業勤務。海外短期滞在経験多（フィリピン・タイ・インド・ネパール・英国・フランス・中国・米国）東京出身。
- B 60代 教育者。中国3年、米国3年、ビルマ2年半、オーストラリア2年、ネパール2年半、パキスタン4年滞在。兵庫出身。
- C 50代 教育者。米国2年2ヶ月滞在。埼玉・東京出身。

A, B, Cは古くからの友人。

②NY・日 1994.6 収録

- A 60代 教育者。米国6年滞在中。東京出身。
- B 50代 教育者。米国4年滞在中。東京出身。
- C 50代 企業駐在員夫人。タイ3年、インドネシア3年滞在、米国1年7ヶ月滞在中。愛媛出身。

AとBは顔見知り。AとCは友人。BとCは初対面。

③HL・米 1994.5 収録

- A 70代前半 企業勤務。中級日本語（話す能力はバイリンガル・レベルに近いか？），訪日経験多。日系二世。
- B 70代前半 教育者。初級日本語、訪日経験多。日系三世。
- C 60代 管理職。中級日本語（話す能力は上級レベルか？），訪日経験多。日系二世。

A, B, Cは友人。

④NY・米 1994.6 収録

- A 40代 日系企業勤務。中級日本語・スペイン語能力あり。イタリア・ポルトガル系三世。
- B 40代 教育者。初級日本語。スコットランド・日系三世。
- C 50代 管理職。初級日本語。ドイツ語・スペイン語能力あり。日本に計4年半滞在。ドイツ系二世。

BとCは親しい友人。Aは顔見知り。

全参加者で、かなりの共通項が浮かび上がってくる。

- ・性－全員女性である。
- ・年齢－40代以上の、いわゆる中高年層である。若年層よりも会話スタイルの個性が確立されていると考えた。各座談内の参加者の年齢の広がりは10年程度である。
- ・居住地域－全員、ニューヨーク、東京、ホノルルという都会に住んでいる。
- ・日米接触－外国人との接触が多い、とりわけ日米同士の接触経験が多く、与えられた話題に関して、豊富な経験と意見を持つ。
- ・経歴－高学歴で職歴を持つ。大半が結婚しているが、非常勤・専任の違いはあってもいわゆる知的職業についており、夫や子どもを通さない、社会との直接的なつながりを持っている。教育者の場合は、外国人に対する英語教育ないしは日本語教育関係者が多い。
- ・語学力－全員が対照言語を学んだか学んでいるかのどちらかである。ただし、バイリンガル・レベルと言えるほどの相手言語能力をそなえている参加者はほとんどおらず、母語が相手言語の影響を受けていると母語話者にみなされた参加者はいなかった。
- ・人間関係－参加者同士の人間関係であるが、大半の参加者同士が友人である。直接の友人ではなくても、共通の友人を通して紹介された人々であり、氏名も属性も知らない未知の人同士というわけではない。

なお、録画・録音の収録者も同じ年齢層の女性である。収録者は最初の説明は行うが司会は行わず、説明後は3人の参加者だけの座談に切り替えた。

(3) Ends 目標

座談の参加者の目標は、異文化コミュニケーションについて日頃の経験談および意見を、自由な座談の中で交換し合うことにあった。収録者からは、参加者に対し事前に電話で以下の目的を説明し、当日は書面および口頭で再度座談の目的を説明した。

説明では、この調査が日本語および英語を母語とする人々のコミュニケーションの実態を把握し、何らかの形で日英間のコミュニケーション改善に寄与することを目指すことであること、日本人と外国人との言語的・文化的差

異を探る試みの一環として行うものであることを述べ、さらに、話題例を提示した。以下に「NY・日」、つまり、日本人向け書面説明の話題例をあげる。なお、[] 内は、「東京・日」の場合の話題例である。

○この地域に住んでどのぐらいになりますか。「東京・日」は、この話題例ナシ]

○アメリカ人 [外国人 (特に英語を母語とする人)] との接触は多いですか。一緒に仕事などをしたことはありますか。

○アメリカ人 [外国人] との間でコミュニケーションがうまく行かなくて困ったことがありますか。

○アメリカ人 [外国人] との間で非常に良いコミュニケーションが持てたと感じたことがありますか。

○コミュニケーションがうまくいったりいかなかつたりする第一の理由はなんだと感じますか。

○この地域に来る日本人 [在日外国人] の数はますます増えているようですが、それについてはどうお感じになりますか。

○この地域でのコミュニケーションと日本でのコミュニケーションとは違う点があると感じますか。[日本での外国人とのコミュニケーションと海外でのその国の人とのコミュニケーションとは違う点があると感じますか。]

○日本人同士のコミュニケーションについてはどう感じますか。

アメリカ人にも類似の話題例を出している。書面は日本語・英語併記の形をとり、口頭説明は参加者の母語に合わせた言語で行った。

(4) Act Sequence 発話の形式と内容の流れ

4つの座談は、1時間から1時間半の長さになった。まず、データ収集者が座談の目的を説明し、個人票への記入を依頼し、記入しながらさらに座談についての質問を受けた。説明のやりとりの中で参加者の承諾を得た上で記録の機器を動かしはじめ、雑談に入った。この間に15分から30分近く経過している。カメラ等に慣れ、収集者との雑談で緊張感がほぼ消えたところで、参加者のみによる座談に入ってもらった。分析を行ったのは、参加者のみに

よる座談が始まって 2 分以上経過した後の、最初の話題から 30 分間である。

参加者は全員話題例を書いた紙を前に、時にそれを見ながら話し合うという形をとった。

(5) Key 基調

参加者同士の間に、上司と部下、教師と学習者といった関係はなく、社会階層差もほとんど見られない点が、日米に共通している。つまり、グループ内の親しさ、上下関係がほぼ同程度に統一されたことになる。比較的親しい友人から顔見知り程度、初対面といったばらつきはあるが、グループ内の親しさの程度の差も座談に影響を及ぼすほどではなかった。座談会のフォーマリティーの程度もテーマも日米ほぼ共通している。テーマに対する取り組みの姿勢も各グループ共通していた。

どのグループもすぐにとけ込み、かなり本音を語り合う、リラックスした座談が生まれた。これは分析者だけでなく、複数の母語話者によって確認されている。

ここで、なぜ女性によるリラックスした座談基調を研究対象としたかを述べたい。タネン（1992）は、一般向けにわかりやすく男性と女性の会話スタイルの差異を説いた書であるが、そこに以下の言及がある。（pp.89-90）

——さて、いったい男と女とでは、どちらがよくしゃべるのだろうか。

一般には、おしゃべりなのは女、と相場は決まっているようだ。何しろこんな諺だってあるくらいだから。

○女の舌は、子羊の尾のようによく動く。

○キツネの命はシッポ、女の命は舌。

○たとえ北海の水は涸れても、女の舌が乾くことはない。——

事情は日本でも同様で、「姦（かしま）しい」の例を引いて、しばしば女が三人も集まればおしゃべりが止まらないかのように形容される。しかし、その場合の「おしゃべり」とはとりとめのない雑談とか井戸端会議といったものを指すことが多い。あるテーマについて意見を交換し合うといった多少ともフォーマルな場となってくると、日本女性の発言が多いという評価はまず

聞かれない。時には、「何事にも意見を言いたがる、口をはさみたがる」といった揶揄をされる米国女性にしても、タネン（前掲書）には以下のような言及がある。（p.90）

— 女はおしゃべりと決めつけられてきたわけだが、いろいろな研究の結果、男女の同席するディスカッションや学校の教室などにおいては、男のほうがうんと口数の多いことがわかった。私自身の講演の経験からも、同じことがいえると思う。テーマが女性を扱ったものであれ、出席者の男女比率がどうであれ、必ず最初に手を上げて質問をするのは男性であり、発言の回数は女性よりも多く、また一回に話す時間も長い。 —

今回のデータは、くだけた場の取り留めもない雑談ではない。といって、多数の聴衆を前にした講演とか報告会とかいった公的なものでもない。あるテーマをもとに、司会者もなしに自由に話し合う座談である。参加者は各座談とも母語話者同士3人ずつである。この設定であれば、かなりコミュニケーションの中で中核的な位置にあるものではないかと考えたのが、研究対象とした理由のひとつである。

(6) Instrumentalities 手段

対面コミュニケーションであり、口頭言語以外は、表情、手や上体の動きなどの非言語表現が見られる。

「目は口ほどにものをいい」を引くまでもなく、非言語伝達が日常の対面コミュニケーション、特に心的態度の表出にはたす役割は大きい。しかし、電話による口頭コミュニケーションや種々の書きことばによるコミュニケーションなども日常的に行われていることを思えば、非言語伝達部分の果たす役割が限られているコミュニケーションでも特殊なものとは言えないのは当然である。

データに用いた座談に関して言えば、比較的非言語伝達部分は小さいと判断し、非言語行動の分析は現段階では限っている。あらかじめイスなどの配置で位置が固定され、相手との距離を自己調整することができず、動作も座ったままの座談なのでかなりの制約を受けている。しかも技術のことである

が、参加者全員の視線、表情を一台のカメラでもれなく追うことができなかつたといった点がその理由である。現段階の分析で含めたのは、録音が可能だった範囲の、笑い、非言語音（咳、テーブルをたたく、など）に限られているが、それだけでもかなりの情報を得た。そして、言うまでもないことだが、言語音で表出された情報は多彩である。

(7) Norms 規範

座談の参加者がどのような文化的ルールに従って言語運用を行っているかを検証するのが本研究の課題である。座談の話題自体にも、出来れば規範に関する各個人の見解が明らかになることを意図して設定され、会話分析を行う中で、各参加者が持っている暗黙の文化的ルールを検証するという目的もある。今回のようなコミュニケーションに関する座談という形は、参加者が認識する言語運用上の規範と、認識していない規範の両者を浮き彫りにする可能性が大きいと考えた。

(8) Genre ジャンル

座談のジャンルを探り上げた理由は以下の通りである。座談は、郵便局や銀行の窓口での応対行動とか、八百屋の店先での買物行動やセールス行動といった、言語表現が設定・環境に密接に結びついた場面ではない。これは、狭義の言語表出によってコンテクストの設定が起こり得る、つまり、言語の比重の重い言語運用場面である。2つの文化間の会話スタイルの比較対照で、狭義の言語表出を重視した対照を試みる場合、座談というジャンルは採り上げる意味が大きいと判断した。

1.3. データの個別性

一般的なデータを得ることを心がけたといっても、本研究は、ある特定の時に、特定の参加者によって行われた4つの座談会のケーススタディである。「HL・米」によって日系アメリカ人女性の会話スタイルを代表させることは不可能であるし、東京座談にしてもNY座談にしても、これが日本人女性、アメリカ人女性の会話スタイルであると一般化することはできない。しかも、

参加者は、各社会の中で、対照文化・対照言語との接触が平均よりもはるかに多いとみなされる人々である。あえてこれらの人々に協力を依頼した理由は以下の3点である。

- (1) 本研究では、会話スタイルだけでなく、座談の内容も重要な意味を持つ。
そこで、テーマについて豊富な経験を持ち、充実した座談が持てる人々の参加を望んだ。
- (2) 与えられたテーマについての背景知識の差は会話スタイルに非常に影響する。これは、佐々木(1994)でも確かめられている。座談の参加者は知識豊富で十分に会話をを行い、自分の会話スタイルをのびのびと發揮できる可能性を持った人が望ましい。そもそも、日常のコミュニケーションは、伝達し合いたい内容がある時に行われるのが普通であり、今回の座談の参加者も与えられたテーマについて、伝達したい内容を十分持つと思われる人々である。
- (3) 現代の交通・通信網の発達はめざましい。現状では座談の参加者たちは平均よりも豊かな海外体験・接触体験を持っているかもしれない。が、次の時代にはそれが一般化する方向に動くのではないかと思われる。

2. 分析の視点

2.1. 発話文の認定

本稿は、以下の2点について数量的な観点からの実証を試みるものである。

- (1) 発話文の数量に、データの日米の女性の座談で差異があるか。それは日本人女性の座談における寡黙性を実証するだろうか。
- (2) 一発話文に込められる情報量に、データの日米の女性の座談で差異があるか。それは日本人の言語に込められる情報量の少なさのひとつの実証となるようなものか。

以下に、「発話文」「情報量」の意味するところを確認しておきたい。

何をもって一発話文とするかは単純な問題ではない。文の定義は各分析者によって微妙に食い違ってくる。本研究では、南(1987), Maynard(1989),

Iwasaki(1993), Clancy(1995)などを参考に、一発話文を以下の基準に従つて認定していった。下の基準のひとつひとつは、ただちに反論され得るものである。ただ、全座談を通して一人の分析者が一貫して文の認定を手がけたということで、ある程度の一貫性はあるのではないか。さらに、分析者が迷った箇所では、複数の母語話者に相談した上で、決定をした。

発話文の認定基準

- (1) ポーズによって区切られている。
- (2) 意味のまとまりを示す。
- (3) 構成部分が一定の音韻・構文上の決まりに従って結びついている。
- (4) 発話者の交代がある。

これらすべてが必要条件というわけではない。(4)が起きないケースはしばしば見られる。Maynard (1989) らの IU (Intonation Unit) は、会話の分析上の単位としてきわめて適切なものであるが、それと発話文との違いは以下の通りである。

例 NY・日

A 001: ①あのー先生はね、②あのーBさんは、③その教える以外に、④あの授業が終わった後で、⑤その、あの英語で話をするなんてことありますか？

この発話は、数字で区切られたように、5つのIUから成り立っている。しかし、構文上からは全体でひとつの結束性が見られるし、意味のまとまりもある。この発話の前後には、ポーズがあり、この後、話者はBとなる。従つて、この発話は、(1)から(4)までの条件すべてを満足した形で、ひとつの発話文と認定される。

2.2. 発話文の文字化

以下の文字化原則で、発話の単位認定の基準をより細かく決めた。

(1) 言語音

文字化の対象は言語音とする。また、非言語音—特に笑いや咳ばらい、歎

声等を注釈の形で記す。拍手や電話の呼出音等、発話に関係する背景音も注釈の形で< >内に記す。メタ言語的情報も必要に応じて注釈の形で記す。

例 UH・米

<笑いながら> <机をたたきながら> <裏声で>

(2) 行替え

同一話者の一発話文ごとに行替えをする。各発話文の終わりにはイントネーションを示す記号をつける。「。」または「.」は下降調、「？」は上昇調、「…」は継続調、「！」は特別な強調・話者の熱意を示す。

例1 UH・米

A 056: So, so, they use a lot of English words.

例2 東京・日

C072: そういう、まー、あの、イギリス連邦のね、国のいわゆる、こう何と
いうか、ゆとりというか…

(3) 相づち

相づちも独立した発話と扱う。話し手がひとまとめの発話を続けている間に打たれる聞き手のあいづちは、何語あっても相手の1発話分でまとめて1発話の扱いをする。

例1 HL・米 B 047 は1発話文とみなす。

A013: Probably the saleswoman<*> was just trying to

B047: <*> Yes,

(A): commu<**>nicate<.>

(B): <**>right, <.>that's right, that's right.

例2 東京・日 B 010 は1発話文とみなす。

A015: ね、そして、御社の<*>ご清栄の御事と思ひますとかね、

B010: <*>うん, うん,

(A): <**>そういう言葉が入ってね。

(B): <**>そーそーそーそー。

(4) 複数話者

特定できない複数話者による同一発話は、文頭に「複」または「pl.」と付ける。〈笑い〉だけの場合は書きだがすが { } に入れて発話番号は振らない。

重複と沈黙に関しては以下の原則を決めた。

(5) 同時発話

複数の話者が同時に発話した場合は、各発話文の重複箇所の始まりに <*> または <**>などを付け、位置をそろえて書き始める。 ((3)の

例 1, 2 参照)

(6) あいの手発話

話者の発話の途中のポーズや弱まった部分に、はめ込まれるように別の話者の発話が入ったときは、最初の話者の「,」「,」「………」などを < > に入れ、あいの手に入った発話の始まりに同じ記号を記して、位置をそろえて書き始める。

例 NY・日 A 018 は「あいの手発話」とみなす。

B019：休みます時ね、学生が <, > でこちらで、あのー電話をしたり <, >

A018： <, > えー, <, > えー

(B)：あーの友達にね <, > 「ちょっとあのー私連絡とれないからあなたから

(A)： <, > えー

(B)：話してちょうどいい」とか…… < • >

(A)： < • > えー。

(7) 引き取り発話

一人の発話を別の話者が引き取って続けた場合は、「=」でつなぎ、それぞれ 1 発話と考える。

例 NY・日

C143：それはもう日本人の人よりも =

A208： = よく言いますねー。

(8) 沈黙

文節や文の間で、認識できるほどの沈黙がある時は、< > に秒数を入れて示す。文中や発話者交替時の沈黙で、認識はできるが自然な感じのポーズに

は「,」を入れ、秒数はとらない。

例 NY・米

B024 : They think we're just<1.3>hoodlum, and terribly behaved and have the manners, and<1.5>mmm***

その他、強調語や外来語表記に関する原則を設けているが、発話文の認定に直接の関係はない。

(9) 表記

日本語は漢字かなまじり文で、英語はアルファベットで文字化する。日本語の会話の中に英語的な発音の語が入る場合はアルファベット表記となる。英語の会話の中に日本語の発音が入る場合は、漢字かなまじり表記、英語的発音の日本語の場合は大文字のアルファベット表記にする。

(10) 音変化

音声の変化はできるだけ忠実に記す。日本語も米語もその音韻体系の中でどう聞こえるかを基準に考える。長く発音された音は、仮名表記の場合、長さに応じて、半角あるいは全角の「ー」、ローマ字表記は「：」で示す。

(11) 強調語等

発話文中でも、上昇調が顕著な単語には「? —— ?」を付ける。特に強調された単語にはアンダーラインを打つ。

(12) 不明音

聞き取りが不可能な箇所は「(?)」、不確実な箇所は「(? depressive/depressing)」などと表す。話者が不明な場合、不確実な場合も、(?A)に入れる。

2.3. 発話量の先行研究

日英の自然会話を対照する研究は数が限られているが、なかでも数量的対照はあまりなされていない。水谷（1985）は数少ないもののひとつである。同書の数量に関する知見をまとめてみたい。

水谷（1985）で対照に用いられた英語資料は総語数 1,385 と量はけっして

多くはないが、以下の 3 種からなる。

- (1) 1968 年、東京在住の米人中流家庭の家族の informal な会話。
- (2) 東京在住のニュージーランド家庭。
- (3) 2 人のアメリカ人女性の雑談。一人は三十代既婚、もう一人は二十代学生。早口できわめてくつろいだ雰囲気。

以上、(1)(2)(3)の資料の中から、話題のまとまりによって 2 ~ 3 分単位に区切ったものを抽出、10 まとまりを分析。発話者の人員は、延べ、五十代 6、四十代 6、三十代 5、二十代 3、十代 23。ただし、十代は人数が多いが、一人あたりの発話量が少ないので、発話量は各世代ほぼ同量となっている。

分析の結果、英語の文の一般的な性格がまとめられているが、数量については以下の記述が見られる。(水谷 pp.60-64)

- (1) 完全文と非完全文の割合は平均 3 対 1 (20 対 1 から 1.4 対 1) ぐらい。
- (2) 文の長さは私的な話では平均 6 ~ 9 語。公的な話ではもっと語数が多い。
- (3) 代名詞が頻繁に、8.3 語に 1 回ぐらいの割合で出てくる。

さらに女性 2 人の話し合いの資料から、以下の特徴もまとめられている。

- (1) 短い clause が多い。Clause をいくつかまとめて文にする。英語の母語話者に音声上の区切りで文を判断してもらっているが、非常にポーズが短いため、構文的には別の文にすべきものが 1 文とされている。
- (2) 言いさしがある。
- (3) 主語と動詞が多い。

これに対して、日本語発話の文はどうか。水谷 (1985) では、国立国語研究所『日本人の知識階層における話しことばの実態』と、テレビ対談の「曾野綾子とロミ山田『あなたとテラスで』」(くだけた口調で家庭と教育について語りあったもの) のふたつが用いられている。

国立国語研究所 (1980) の分析から、長さについては、2 文節から 3 文節の発話が多いこと、音節の数からいくと、7 ~ 8 音節が多いことが引用されている。そして、英語の基本的な語は 1 音節語が大半であることを考えると、長さの点では英語の 6 ~ 9 語平均と似かよっていることが指摘されている。

さらに、日本語の女性2人の話し合いから文の認定の難しさが指摘されている。英語例の場合約80語におよぶ話の間、聞き手は一言もあいづちを入れていない。日本語例ではきわめて頻繁に打たれている。あいづちの平均頻度は1分間に約20(11~26)、あいづちとあいづちの間の音節数は平均20である。あいづちが入る部分は音声的に弱まりが見られることが多いので、これを文のおわりとすれば、文の長さはいきおい平均20音節となり、文の形としてはいわゆる未完結文が圧倒的に多くなる。(前掲書pp.61-65)

以上、水谷(1985)の数量的対照部分を簡単に引用した。本研究のデータでも同様の傾向が見られるのだろうか。

3. 考 察

3.1. 沈黙量の差

どの自由座談にも、ふっと話が途切れる時がある。このような会話の流れが途切れるような沈黙は、母語話者によって沈黙として認識される。これは会話の流れの中で自然だと感じられるポーズとは性格が異なるものである。文化によって、あるいは個人によって許容される、または逆に意識されるような沈黙の量は異なると思われる。座談によって、日米によって、沈黙量に大きな差があつただろうか。ここでは「寡黙性」を座談中の沈黙の長さの长短と既定し、その計測を試みた。^{注)}

母語話者によって認識された沈黙で、Jefferson(1989)に習い、1秒以上の長さを持つものを採り上げる。

沈黙の回数から見ると、多い順に、「NY・米」25回、「東京・日」14回、「NY・日」8回、「HL・米」5回となる。この数字からは日本語と米語で差があるという見方はできない。さらに、沈黙回数が一番多いのは「NY・米」座談であるが、これが沈黙の一番少ない「HL・米」座談に比べて、「会話の流れがはずまない、会話が途切れがちだ、参加者が寡黙だ」といった印象は与えない。以上からも、座談の沈黙の回数は寡黙性とは結びつきにくいと考えた。

表1 認識された1秒以上の沈黙
回数／秒単位の長さ

東京・日	1/1.1, 2/1.2, 3/1.8, 4/2.2, 5/2.0, 6/9.3, 7/2.0, 8/3.0, 9/1.8, 10/2.0, 11/2.1, 12/3.0, 13/1.7, 14/3.0
N Y ・ 日	1/2.8, 2/1.6, 3/6.5, 4/1.2, 5/3.0, 6/2.5, 7/2.6, 8/1.6
H L ・ 米	1/2.6, 2/1.2, 3/1.8, 4/1.6, 5/5.1
N Y ・ 米	1/2.1, 2/1.4, 3/1.2, 4/2.0 5/1.1, 6/1.3, 7/1.5, 8/1.0, 9/1.2, 10/1.6, 11/1.7, 12/1.0, 13/1.6, 14/2.0, 15/2.5, 16/1.5, 17/1.7, 18/2.0, 19/1.8, 20/3.8, 21/1.8, 22/1.6 23/1.3, 24/2.0, 25/1.2

次に、沈黙の総時間および1回あたりの平均秒数はどうだろうか。

表2 沈黙の長さ

	沈黙回数	沈黙総秒数	秒数／回
東京・日	14	36.2	2.59
N Y ・ 日	8	21.8	2.73
H L ・ 米	5	12.3	2.46
N Y ・ 米	25	41.9	1.68

一回あたりの沈黙の長さでは、日本語座談の方がやや長いという結果になる。さらに、最長の沈黙を見ていっても、「東京・日」の10秒近いもの、「N Y ・ 日」の6.5秒、そして「H L ・ 米」の5.1秒、「N Y ・ 米」の3.8秒の順となる。

米語話者は座談の途中で長い沈黙が入るのを回避する傾向が強いと結論付けるにはデータ量があまりに限られているが、ひとつの可能性としては考えられよう。

しかし、いずれにしろ、各座談の30分、つまり1,800秒を分析対象としているので、その中の10秒か40秒かといった程度の差は些少ではないだろうか。つまり、発話時間に関してはほとんど差がないと言えよう。ただ、話者の交代の際の（自然と感じられる）ポーズ、一人の話者が一発話文中に置く息継ぎのポーズに話者によって微妙な長さの差があり、言語音が発せられている時間だけを測ればまた違う値が出てくることは確かである。例えば杉藤（1987）では、二人の発話者の発話時間とポーズとの時間例が以下のように示されている。

	拍数	発話時間	ポーズ	発話：ポーズ
話者A 発話 1	53	6.405	2.901	69%:31%
話者A 発話 2	37	5.002	3.287	60%:40%
話者B 発話 1	58	6.965	3.190	69%:31%
話者B 発話 2	104	11.459	4.459	72%:28%
話者B 発話 3	109	12.792	2.436	84%:16%

そして、話上手な話者Bの場合、言い淀みの多い発話1と、興にのって語る発話2、3では、発話とポーズの時間関係が異なることが述べられている。
(杉藤 pp.125-127)

本稿では、息継ぎ等のポーズは、それぞれの複数の母語話者から自然だと感じられた範囲であるので発話時間の方に含めている。この計測方法からわかったことは、4座談においては米語話者の方が長い沈黙を避ける傾向が見られたが、差は些少であり発話時間にはほとんど差がないことである。日米共に絶え間なく話が続き、寡黙性を沈黙量で規定した場合には、日本女性が米国女性よりも寡黙であるとは言えない。

3.2. 発話文の数

本研究の「発話文」は、水谷（1985）の「文」の単位、Maynard（1989）やIwasaki（1993）のintonation unitよりも長く、未完結文も少ない。より英語の文に近い単位認定をしていると言えよう。そこで、4つの座談における各参加者別の発話文数と総発話文数を見てみる。

表3 発話文数量

	A	B	C	複数発話	総発話文数
東京・日	277	239	156	16	688
N Y・日	223	208	149	27	607
H L・米	107	287	122	0	516
N Y・米	179	192	120	0	491

総発話文数では、明らかに日米で差が出ている。日本語座談の発話文数が多いのである。この表だけを見れば、むしろ日本女性のほうが発する文が多いことになる。本稿では内容分析には入らないが、4座談の中でもっとも内容的に充実しているという印象を与えるのが、「NY・米」座談であるという事実は興味深い。というのは、「NY・米」座談が、もっとも沈黙回数・沈黙時間が多く、総発話文数が少ないからである。これは一見矛盾しているように感じられる。以下、この点を他の角度から考えてみたい。

3.3. 発話文の長さ

以下に、アメリカ人の大学生たちが2ヶ月間の地方でのホームステイを終えた際の座談会に見られた発言を引用したい。発言者のうち、Aは男性の大

学院生，Bは男性の大学生である。

(原文英語，訳筆者)

—アメリカ人学生座談会

A：(日本語の日常会話では)いつも短い縮約形と動詞だけが使われる。文の形はとらない。

B：確かに、うちの12歳の男の子の会話っていうのは「ママ,<早く短く>(ムニヤムニヤ)?」そしてお母さんが「はい」と答えて終わり。なんか口の中で上昇調でぼそっと言うだけ。それでいてそこに意味が存在するんだから!

A：うちにはおじいさんがいるんだけど、じっとにらみをきかせていて、話す時っていうのは、短く低くうなるんだ。—

日本滞在がさほど長くない外国人の耳に、日本語が早く短く響くということは当然予測できる。しかし、これは未知の言語、あまり習熟していない言語に接した時にしばしば感じられることではないだろうか。日本人の発話文は実際に早く短く発されるのだろうか。短いとすれば米語に比較してどの程度短いのだろうか。

日米の一発話文あたりの時間数の長短は、単純に発話時間を総発話文量で割っても出てはこない。以下のような可能性があるためである。

- (1) 発話の重複が多く、一つの時間帯に2つないし3つの発話が重なっている可能性。
- (2) 実質的な意味を持つ長い発話と、相づち的な大量の短い発話文があるにもかかわらず、平均化された形で全体に短いとみなされてしまう可能性。そこで、3.4と3.5で(1)の発話の重複について、3.6以下で、(2)の「実質的な意味」について考えてみたい。

3.4. 重複の起り方

2つの発話が重複して発され、ひとつの発話の約80%以上がもう一方の発話に重なるものを重複発話と呼び、ここでとりあげてみたい。重複発話には2.2.の(5), (6), (7)で触れた通り、以下の種類が見られる。

(1) あいの手発話

話し手が息継ぎのポーズ、あるいは、語末や文末で声を弱め、聞き手の相づちを誘ったり待ったりした時、聞き手がタイミングよく相づちをはめ込んでいくような形。相づちを打つほう、つまり、聞き手の重複発話と数える。

(2) 同時発話

たまたま同時に話し始めてしまうか、ターンを獲得する意図のもとに相手の発話に重ねて発話するかの違いはあるが、複数の発話者が同時に話すもの。短い発話者の重複と数える。

(3) 引きとり発話

一人の発話を、別の人気が引き取って完成するもの。引き取ったほうの話者の重複と数える。

各重複発話は以下のような分布を示した。

表4 重複発話文数

	A			B			C			複	
	(1)	(2)	3)	(1)	(2)	3)	(1)	(2)	3)	(1)	(2)
東京・日	20	53	2	37	47	2	10	31	3	5	1
N Y ・ 日	43	38	3	16	30	1	39	48	4	13	2
H L ・ 米	7	21	1	23	81	0	4	17	2	0	0
N Y ・ 米	16	17	0	7	12	3	0	10	2	0	0

「あいの手発話」の数を見ると、アメリカ人の場合でも、一人を除き、話者が息継ぎなどでポーズを入れたり声を弱めた時に聞き手が賛同の意や興味を表明することがかなり行われていることを示唆している。が、それと同時

に、「あいの手発話」における、日本人参加者の圧倒的優位は動かない。さらに、「NY・日」のAを除けば、全員「同時発話」が「あいの手発話」を上回ることがわかる。同時発話、引き取り発話を合わせた総計で見ても、日本人の話者は重複発話が多い。「HL・米」のBを除けば日本人が圧倒的という感じである。「HL・米」のBは、どの参加者よりも重複発話が多い。内訳では、引き取り発話は0で、同時発話が多い。このことから、日本語に比べると米語は「あいの手」という会話スタイルが確立していないということが、まず考えられる。ひとつの証拠として、「NY・C」は一度も「あいの手発話」を発していないのである。しかし、同時に「NY・米」A、Bのように、割合から言えば「あいの手発話」が多い話者もいるわけで、「HL・B」はこの座談において、他の話者に合わせるというより、かなり強く自分の主張を自分のタイミングで発信していくタイプの話し方をしたということは言えよう。日米を通して他の参加者には見られなかった会話スタイルであり、これからBのケースは、文化差よりも個人差、あるいは、集団の中の人間関係といった要素に帰するほうが妥当であると判断した。

3.5. 重複部分の割合

重複発話文は発話文全体の中でどれくらいの割合を占めるのだろうか。以下の一覧は、各話者と各座談毎の重複文の数と全発話数に占める割合を示す。

表5 重複発話文の数と率

	A (%)	B (%)	C (%)	複数(%)	重複文 (%)	総発話
東京・日	75 (27)	86 (36)	44 (28)	6 (38)	211 (31%)	688
NY・日	84 (38)	47 (23)	91 (61)	15 (56)	237 (39%)	607
HL・米	29 (27)	104 (36)	23 (19)	0	156 (30%)	518
NY・米	33 (18)	22 (11)	12 (10)	0	67 (14%)	491

ここで目だって重複が少ないので「NY・米」座談である。これに対して日本座談は重複総文数においても両座談とも 200 を越し、割合から言っても 30%を越している。日本語話者の場合もっとも重複が少なくても、「東京・日」の C の 44 発話である。これに対して米語話者は 6 人中 4 人が 10%台の重複率である。そして、もっとも少ない話者は重複が 12 発話文で自分の発話総量に占める割合も 10%となっている。

さらに、以下の表のパーセントは、各話者が座談の重複文のうちのどれぐらいの割合を発したかを示している。

表 6 話者別の重複率

	重複文	A 文数(%)	B 文数(%)	C 文数(%)	複数 文数(%)
東京・日	211	75 (36)	86 (41)	44 (21)	6 (3)
NY・日	237	84 (35)	47 (20)	91 (38)	15 (6)
HL・米	156	29 (19)	104 (67)	23 (15)	0
NY・米	67	33 (49)	22 (33)	12 (18)	0

即座に目に付くのが「HL・米」の話者 B である。実に 70% 近くの重複が集中している。他のどの話者を見ても、50%に達していないことを考えると、「HL・米」の B の場合は際だつと言うべきであろう。B が A, C と同じような会話スタイルで話したとしたら、「HL・米」の座談中の重複発話の発生率は限りなく「NY・米」座談に近づくのではないだろうか。

上記の表の裏返しの数字が以下の表である。

改めて、「NY・米」座談のみが、非重複文の占める率が 80% 台であること気がつく。これが、座談の充実を感じさせるひとつの要素であろう。

表7 非重複発話文数量

	総発話文	重複文	非重複文数 (%)
東京・日	688	211	477 (69.3%)
N Y・日	607	237	370 (61.0%)
H L・米	516	156	360 (69.8%)
N Y・米	491	67	424 (86.4%)

3.6. 発話の実質量の大小

日本語と米語とでは、実質量大と実質量小の文の割合が異なるのだろうか。異なるとすればどのように異なるのだろうか。「実質量」とは、内容語があり命題的内容を含み、対人関係的機能もさることながら情報伝達的機能をしつかり担っている発話という意味である。これを「実質内容量が大きい発話=実質量大」と考える。

日常の会話ではひとつの機能だけ担った短い発話が発されることもあるが、複数の機能を担う発話文が多いことも事実である。文の中でひとつの機能を担う要素を特定できるとするかしないかは意見の分かれるところであるが、命題的要素、結束的要素、対人的要素、などが微妙に絡み合う発話は多い。Iwasaki (1993) による実質量大の IU (Intonation Unit) の分析では、日本語の場合 3 機能要素を持つ IU は 13.3%，4 機能要素を持つ IU は 1190 中 3 例にすぎなかったという。これに対して、1 ないし 2 機能要素からなる IU は多く、特に命題的要素 + / - 他機能要素は全体の 87.4% を占め、米語の 1 IU、1 要素とは対照的だと言う。本稿の発話文は IU の中でも Clause とされる、42.2% の部分に相当するものであり、IU の残りの 57.8% はもっと短い unit であることを思えば、より長い単位である「発話文」において複数機能

の割合が高くなることは推察できる。

しかし、本稿では Iwasaki (1993) の分析から除外された発話文、つまり、命題的要素を持たない、あるいは命題的要素の存在が希薄な発話文を見ていく。これらを「実質量小」の発話文と呼び、本研究の女性座談においてどのような分布をしているかを見てみる。

実質量の決定は以下の基準に従って行った。先行研究の中では杉戸(1987)に拠るところが多い。

実質量小の発話は以下の基準のどれかにあてはまるものである。

(1) 内容語が存在しないもの。

いわゆる狭義の相づちで、主として応答詞からなる発話文はこれに含まれる。

例 1 NY・日

A023 : <, >えーえーえー, <, >えー, <>えーえ, <. >えー。

例 2 HL・米

B005 : <, >Right, <, >right, <. >yes.

笑い声だけの場合は発話文に含めていないが、感動詞だけの場合は発話文に数えている。これらは、たとえ重要な意味伝達機能を果たしていたとしても、実質量小と呼ぶものである。

例 3 東京・日

B033 : まー, まー, まー, まー。

例 4 NY・米

B009 : Oh!

(2) 内容語はあるが、単なる繰り返しや確認、聞き返しで新情報の付加がないか、その機能が軽視されているもの。

例 5 東京・日 A 221

C121 : あ、国内だからね<*>うーん。

A221 : <*>国内便で、あそこ。

例 6 NY・米 A 043

C027：(略) if you sit up the bar, <*>it's an invitation for people

A042：(略) <*>uh-huh.

(C) : to talk to you.

A043: Uh-huh, right, that's why you're sitting there, uh-huh.

(3) 途中で(さえぎられ), 実質情報を含まない段階で話し手が発話をやめてしまつたもの, あるいは続いているが他の人には聞きとれないもの。

例7 NY・日

B109: あ, もう…その…

例8 NY・米

B159: Maybe it's 'cuz…

3.7. 実質量小の発話が多い参加者

表8は実質量小と判断された発話文数の一覧である。

表8 実質量小の発話文数

	A			B			C			複
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	
東京・日	91	6	10	114	11	13	52	3	8	16
NY・日	111	12	2	40	6	7	102	8	4	27
HL・米	14	7	10	95	15	21	12	8	8	0
NY・米	56	4	6	32	0	4	7	2	5	0

(1)内容語が存在しないもの, (2)内容語はあるが, 新情報の付加がないか軽視されているもの, (3)途中で(さえぎられ), 実質情報を含まない段階で話し手が発話をやめてしまつたもの, の分布を見ると, 個人の会話スタイルの特徴が浮かび上がってくる。(1)と(2)が多い発話者は, 相づちタイプ, 聞き手タイプ, 察しタイプと言えるかもしれない。ただし, 発話権獲得のため

の相づち多発も考えられるので、受け身の発話者とも言い切れない。総発話数の多い、「東京・日」のAとB、「NY・日」のAとB、「HL・米」のBは、「NY・日」のBを除けば、やはり(1)の数が多いのである。また、(3)が多い発話者は途中で言いかけてやめてしまうタイプ、他の話者が始めるとすぐ発話権をゆずってしまうタイプ、なかなか内容語彙は発しないタイプと言えよう。データで見た限りでは、NY座談で日米共に(3)のタイプがかなり少ない点が興味深い。言い換えれば、話し始めたからには実質情報をしっかり含める傾向が強いのである。

以下は、話者毎に、実質量小の文の発話文数と各自の総発話に占める割合を見たものである。

表9 実質量小の発話文の率

	A (%)	B (%)	C (%)	複数(%)	総小量
東京・日	107 (39)	138 (58)	63 (40)	16 (100)	324
NY・日	125 (56)	53 (25)	114 (77)	27 (100)	319
HL・米	31 (29)	131 (46)	28 (23)	0	190
NY・米	66 (37)	36 (19)	14 (12)	0	116

実質量小の発話文が100を越える参加者は、「東京・日」のAとB、「NY・日」のAとC、「HL・米」のBとなる。これは重複文数の多い参加者と重なるわけで、重複文には当然のことながら実質量小の文が多いということを示している。特に日本座談では、3人の参加者のうち実質量小の発話が少ない人でも50発話文を越えるわけで、総計が両座談とも300を越えることと合わせて実質量小の発話が多いことは明瞭である。「HL・米」のBは米語話者の中ではば抜けて実質量小の発話が多い。発話数が同じ130台の発話量を持

つ「東京・日」と比較すると、「HL・米」の場合は全発話量に占める割合が50%を下回っており、「東京・日」のBに比べて10%以上も低い。つまり、「HL・米」のBの場合は、実質量大の発話も多かったということになる。個人差は無視できないが、やはり日米では日本語話者の方が実質量小の発話の多い傾向ははっきり指摘できよう。

3.8. 実質量大の発話

データに現れた限りでは、日本語座談は実質量大の文がほぼ2文に1文程度の割で発されることになる。これに比べて、「HL・米」座談では60%台、「NY・米」座談では70%台と、割合が高くなる。つまり「NY・米」座談では、発話の4分の3が実質量大であるとなるわけで、これが座談に充実感を感じさせる大きな理由になっていると言えよう。

表10 実質量大の発話文の率

	総文量	総小量	実質大文数 (%)
東京・日	688	324	364 (53%)
NY・日	607	319	288 (47%)
HL・米	516	190	326 (63%)
NY・米	491	116	372 (76%)

4. おわりに

4.1. データの数量的分析が示したこと

日米の女性の座談を数量的観点から対照してきた。データの範囲で以下の点が見られた。

- (1) 沈黙の回数から見ると日米の女性座談で差があるという見方はできないが、データ中の米国人、日系米人、日本人の順で座談の途中に長い沈黙が入るのを回避しがちな傾向が見られた。
- (2) 座談における「寡黙性」を沈黙量から規定した場合は、日本人女性が座談において寡黙であるという仮説はデータでは支持されなかった。
- (3) 発話文数の総数だけ見ると、明らかに日本語座談は米語座談より数が多く重複も多い。発話数の点だけから言えば米国女性の方が口数が少ないことになる。
- (4) 実質量小の文の発生率と重複文の発生率はほぼ呼応する。日米座談では日本語のほうが高い発生率を持つ傾向が指摘できる。
- (5) 日本語座談は実質量大の発話文が2文に1文程度の割で発されることになる。これに比べて日系米人座談では60%台、米国人座談では70%台を占めた。
以上の結果が出たが、これはあくまでも4つの座談のケーススタディで見られた傾向である。

4.2. 今後の研究で採り上げたいこと

本論文は、なぜ女性座談の対照研究をするのか、そして質的・内容的分析に入る前段階として、数量的な観点から何が見えるかを探り上げた。今後以下の諸点についての分析を試みたいと考えている。

今回の報告は実質量小の発話を中心に数量的に見ることで、日本人とアメリカ人の会話スタイルについて考えたものである。今後は質的な分析を行うことと、実質量大の発話を見ることの2点を心がけたい。実質量大と分類された発話文の場合、日米で文の長短や込められた情報量の大小にどのような傾向が見られるだろうか。発話文には、様々なコミュニケーション上の機能が与えられている。特に、話者交代や発話者のサポートといった談話管理の機能、心的態度の表出といったモダリティー機能などは、日米でどのような差異を見せるだろうか。複数機能の扱い方にも差異があるはずである。座

談は話題に従つていくつもの単位に分かれ、ひとつの構造体をなしているわけであるが、日米で構造体の差異が見られるであろうか。座談の参加者のコミュニケーション観と、現実の座談の実態との関係、話題の展開の型の比較対照などについても、データは何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

そして、地球上の多くの国々が多文化化しつつある今、国単位、言語単位の会話スタイルの追究ではなく、性別や社会階層、職業毎の会話スタイルの比較対照も求められる。女性同士の座談における、直接(間接)性、親しさ、自己表現等はどのようになされるのだろうか。また、今回は40代以上の女性の座談を見たが、若年層の座談との比較対照も今後予定している。さらに、男性の座談との比較対照も興味深い。特に、性差と文化差、個人差との関係などについても何等かの示唆を得たいところである。

[注] 沈黙の時間の測り方は、佐々木(1994)と同様に、会話のテンポに従つて分析者自身で数えた。ただし、東京大学大学院人文社会系研究科 宇佐美洋氏の協力を得て、パソコンを利用した機械的計測も行い、値を照合した。誤差はわずかであったが、誤差がある場合は分析者の再度の計測によって値を決定した。

[参考文献]

- Brown, G. & G. Yule (1983) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press
Clancy, P. M. (1995) "Psycholinguistics, Language Acquisition and Japanese Discourse", in Maynard, S. K. (ed.) *Japanese Discourse* Vol. 1, pp. 35-45
Hymes D. (1972) "Models of the interaction of language and social life", in Gumperz, J. J. and D. Hymes (eds.) *Directions in socio-linguistics : The ethnography of communication*, New York : Holt Rinehart Winston, pp. 35-71
Iwasaki, S. (1993) "The Structure of the Intonation Unit in Japanese", in Soonja Choi (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* Vol. 3, Center for the Study of Language and Information Publications, Stanford University
Jerrerson, G. (1989) "Preliminary notes on a possible metric which provides for a 'standard maximum'silence of approximately one second in conversa-

- tion”, in Roger, D. & P. Bull (eds.) *Conversation: an interdisciplinary perspective*, Clevedon, England Multilingual Matters Ltd, pp. 166–196
- Maynard, S. K. (1989) *Japanese conversation: self-contextualization through structure and interactional management*, Norwood, N. J., Ablex
- Sacks, H., E. Schegloff & G. Jefferson (1974) “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation”, *Language* 50, pp. 696–735
- Tannen, D. (1984) *Conversational Style: Analyzing talk among friends*, Norwood, N. J., Ablex
- Tsuda, A. (1984) *Sales talk in Japan and the United States: An ethnographic analysis of contrastive speech events*, Washington, D. C., Georgetown University Press
- Yamada, H. (1992) *American and Japanese business discourse: a comparison of interactional styles*, Norwood, N. J., Ablex
- 井出祥子ほか (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
- 稻村 博 (1970) 『日本人の海外不適応』 日本放送出版協会
- 金田一 春彦 (1975) 『日本人の言語表現』 講談社
- 佐々木 優子 (1994) 「会話スタイルとラポート—日英・若い女性の座談例から—」
『研究報告集』15 国立国語研究所 pp.251–286
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所 pp.68–106
- 杉藤 美代子 (1987) 「ポーズとイントネーション」『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所 pp.107–138
- タネン D. (1992) (田丸 美寿々・訳) 『わかりあえない理由』講談社 (*You Just Don't Understand* by Deborah Tannen)
- 外山 滋比古 (1973) 『日本語の論理』中央公論社
- バーンランド D.C. (1973) (西山 千・訳) 『日本人の表現構造』サイマル出版会
(*Public and Private Self in Japan and the United States* by Dean C. Barnlund)
- 水谷 信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 南 不二男 (1987) 「談話行動論」『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所 pp. 5–35

[謝辞]座談に快く協力して下さった日米12人の皆さんに感謝したい。ニューヨーク座談の収録は、ニューヨーク在住の斎藤令子氏の協力を得た。また、データの文字化資料作成にあたっては、研究補佐員の難波京子さんほか多くのアルバイターの

協力を得た。米語のデータに関しては，Virginia LoCastro, Cindi Sturtz, Michael O'Connell の 3 氏に，データチェックをはじめとする種々の協力を得た。さらに，国立国語研究所研究部会議（1995 年 10 月 25 日）で研究発表を行い，同僚諸氏の意見を得た。しかし，本稿の最終的責任は，文字化資料も含めてすべて筆者にある。